

6 節、「そこでモーセとアロンはそのように行った。主が彼に命じられたとおりに行った。」

モーセとアロンには 2 つの闘いがありました。

1 つは、外からの闘いです。エジプトの王ファラオとの闘いです。

2 つ目は、内からの闘いです。同朋イスラエル、自分の心の内側から、弱さとの闘いです。

(1、2 節) 今、モーセは外側からの、異邦人エジプトの王ファラオの反対と、内側からの同朋イスラエルの突き上げによって板挟みになっています。非常に苦しい立場に立たされています。でも彼は実際に苦しんでいる同胞イスラエル人を見ると、もうこれ以上「主のみことばに従いましょう」とは、とても言えなくなりました。心のやさしいモーセは今、気がすっかり弱くなっていました。

(1、2 節)、ところがあえて、悩んでいるそんなモーセに主は語られました。「見よ、わたしはあなたをファラオにとって神とする。あなたの兄アロンがあなたの預言者となる。あなたはわたしの命じることを、ことごとく告げなければならない。」

——— モーセに繰り返し語られる神様 ———

主は、今まで繰り返し繰り返しモーセに「ファラオに伝えよ」語られて来ました。

3：10 節、4：22、23 節、6：10、11 節、6：28 節。しかし、モーセは「私は口べたです」と繰り返し言い訳をして来ました。その時です。主は、再度語られました。7：1、2 節です。

——— モーセは神、アロンは預言者 ———

ここで主は、ファラオに対しては「モーセを神として、アロンは預言者とする」と言われました。何故でしょう。それは、ファラオが今まで、まさに自らを神として、傲慢にも人々の上に君臨していましたので、神様は、本当の神のごとき者は、お前の様な人間臭い者ではなく、モーセの様な聖い者であることを、ファラオに伝えるために、あえてこの様に言われたのだと思われます。7：1 節

「わたしはあなたをファラオにとって神とする。・・・アロンはあなたの預言者となる。」

神様は、あえてモーセに言いました。「お前はファラオの前に神のような者になるのだから、たとえこのことによって、イスラエルが益々苦しい立場に追い込まれたとしても、それによって神の業が彼らの上に現れるのだから、しっかり語りなさい。人間的に配慮したり、遠慮したりしないで、神から命じられたみことばを、今こそわたしを信じて語りなさい。全部その通り語りなさい。わたしが責任をとるから。」

しかし、繰り返しますが、神様のことばを、その通りに全部を語るということは、決してなまやさしい事ではありません。誰でも世間体を気にしたりします。相手の立場について同情してしまうこともあるでしょう。でもそれでは、いつまでたっても神のことばは語れません。神様の業は行えません。イスラエルをエジプトから救えません。

——— 心を鬼にして ———

あえて神様は語られました。「あなたはわたしの命じることを、ことごとくファラオに伝えなければならない。」そして、神様は、次の4つをモーセに伝えました。

- ① 「例え、あなたの同胞イスラエルの民の協力がなかったとしても、わたしのことばを語りなさい。
- ② 例え、ファラオが反対しても、状況が悪くなったとしても、わたしのことばを語りなさい。そしてわたしに従いなさい。
- ③ 例え、自分の弱さを意識して、自信を無くしても、わたしのことばを語りなさい。
- ④ わたしが、わたしの結果をだすから。わたしに従い、わたしのことばを語りなさい。」

それにしても、神様のことばを聞いても残念ですが、心を頑なにする人が確かにいます。それは「きっと神様が、そうさせておられるに違いない。きっと神様が何らかの方法で、その方の上に御業を現わそうとしておられるのだ。」と、思ったらよいのではないのでしょうか。神様のみことばを語るにくいその人こそ、実は神様が私たちを通して語ることを期待しておられる人なのかも知れません。

・例えば、預言者ナタンは、王様ダビデに最も語るにくい、ダビデの罪（殺人、姦淫）を指摘しました。（サムエル記 12：7～9）イスラエルの王、ダビデに、預言者ナタンは、神様から遣わされて彼の罪をはっきりと指摘しました。「あなたがその男です。殺人者です。姦淫をした本人です」ナタンのことばによってダビデは悔い改めて、罪から救われました。

・後の救世軍大将ウィリアム・ブースと婚約したカサリン・マンフォード姉は、その婚約期間中、彼への愛の手紙の中に次のような最も語るにくいことを書いて、伝えました。「人の顔を恐れてはなりません。あなたは神のしもべなのですから。あなたが忠実な神のしもべであるならば、人からの批判は小さきものと受け止めなさい。恐れてはなりません。」彼女は世界で一番愛する人に、一番語るにくいことを伝えたのでした。

——— ファラオの心を頑なにする ———

（3、4 節、読む）ここには、神様のみことばを聞くことによって、「ファラオの心は頑になる」と書かれています。

出エジプト記の中には、約 18 回以上もファラオが心を固くしたとか、神様がファラオの

心を固くしたとか書かれています。

でもこれは、機械的に主がファラオの心を頑なにしてファラオを操り人形のようにされるということではありません。実はファラオは自分の責任で、主に逆らう道を選び取ったのです。主はあらかじめ、その事を知っておられたのでモーセに伝えたのでした。

例えば、同じ日光に照らされても、ロウは柔らかくなります。しかし、泥は固くなります。同じ様に神様のことばを聞く時に、心頑なになる人と、喜んで心砕かれて受け入れてくれる人とがいるのです。神様の寛容と憐れみとを受けながらも、心すなおに罪を悔い改める人がいれば、逆に神様をあなどって心かたくなにする者もいるのです。

(4 節、読む) 今神様がモーセを通して、あわれみと寛容な忍耐をもってファラオに語っています。しかしファラオは大きな態度で、神様の心を踏みにじり自らの心を頑なにしました。神様はファラオの心のままになさいました。(ローマ 1:24 節)「そこで神は、彼らをその心の欲望のままに汚れに引き渡されました。」実は、主は心頑な人の上にも、みことばを受け入れる人の上にも、同じ様に語られたご自身のみことばを、成就される神様であられます。

(5 節、読む) そして、主はご自身のみ力を現わされました。モーセは主を信じ、主に従って、主のみ力いただきました。ファラオは主に逆らって主のみ力を自らの上に現わしました。結局、主はこの二人の上に同じみことばによってご自身の栄光を現わされました。しかし主を信じて主の栄光を現わすのと、不信仰によって主のみ力を現わすのと大違いです。私たちはそのどちらなのでしょう？

(2~5 節) ファラオは裁かれて、主のみ力を体験し、モーセたちの神が、真の神、主であることを知ったのでした。 こうして、いよいよ出エジプトは動きだしました。

——— みことばを成就される神様 ———

(6、7 節) 6 節「そこでモーセとアロンはそのように行った。主が彼らに命じられたとおりに行った。」

今まで「私は口べたで語れません。」と繰り返し繰り返し、神様に向かって「私は出来ません」と語っていたモーセでしたが、ここでは、モーセ、アロンは、主が命じられた通りに語りました。特にモーセは、ファラオに心を鬼にしてしっかりと語りました。

——— 人それぞれに生かされる時がある ———

7 節、「彼らがファラオに語った時、モーセは八十歳、アロンは八十三歳であった。」

創世記の終わりの所には、ヨセフは三十歳の時にエジプトで総理大臣になり、大活躍したことが書かれています。神様はある時は 30 歳の青年を用いられます。またある時は 80 歳の老人を用いられます。ジョン・ノックスは 40 歳になるまでは普通の人でした。しかし、その頃からはようやく彼は光輝きだしたのです。私たちも今の生かされている人生、最後の最後まで神様の栄光を現わして歩ませていただきたいものです。